

マンロー・テキストは なにを「返還」するのだろうか

マンロー関係資料デジタル化プロジェクトの今日的意義

What Will the Munro Text "Repatriate"? : Present-Day Significance of the Project for Digitizing Materials Related to Neil Gordon Munro

出利葉浩司

DERIHA Koji

はじめに

- ① N. G. マンローとその研究 および本稿でとりあげるマンロー・テキストについて
- ② マンロー・テキストに内在する情報はなにか
- ③ 文字情報は、誰の、どんな役に立つのか
- ④ 資料返還運動からみた文字情報
- ⑤ 返還されることのメリットはなにか
- ⑥ 文字情報の返還の意義
- ⑦ まとめと今後の課題

【論文要旨】

ここ二十年近く、北米あるいはオーストラリア地域で政治的に問題化され、人類学的課題としても議論されてきたことのひとつに、先住民から収集し博物館などに保管されてきた「資料」の、先住民社会への「返還運動」がある。そして、返還される「資料」については、これを文字記録や写真にまで拡大してとらえ、「Knowledge repatriation」として考えていこうとする動きもある [Krupnik 2002]。

この研究でも、「資料」の枠を拡げてかんがえ、博物館や文書館などの施設がこれまで保管してきた民族誌的情報が記述された文書類をとりあげ、そこに記録された内容が直接関係している民族集団への、記録された「内容」の「返還」について考える。

対象とする資料は、とくにRAIが保管してきたニール G. マンロー書簡類のうち、1931年から40年まで、セリグマン博士 (Charles G. Seligman) に宛てて書かれたものである。マンローは、アイヌにかんする民族誌を出版すべく、当時ロンドン大学教授であったセリグマン博士に原稿を送り、あわせて近況を報告していたが、書簡には、このほか、研究上の問題、悩みから日常生活に至るまでが記述されている。

これらの情報は、アイヌ民族誌として意味があることはもちろんであるが、マンローの著作「Ainu Creed and Cult」や、彼が残した映像・画像記録について、それが作られていく状況や背景が説明されているという点で重要なものである。さらに、「伝統的アイヌ文化」ではなく、ひろく当時の平取の様子、そしてそこでのマンローと人びととの「かかわりあい」を知るうえでも重要な資料となるものである。

本研究プロジェクトでは、筆記あるいはタイプ打ちされ、判読が難しいマンローの書簡類を、翻刻し翻訳したうえで、二風谷在住のアイヌの人々の代表といっしょにそれを読み込み、公開に向けての準備をおこなった。

筆者は、これらの一連の作業に参加したが、この論文では、いったん、その立場を離れ、作業を客観的に見ることを試みた。その結果、本作業が、アイヌの人びとと博物館側との協働作業による民族知の返還と位置づけられること、さらにその作業が「テキストとそこに記述された人びととの相互の接近」であったこと、そしてこれまで博物館が先験的におこなってきた「作業」を、協働して分担する道を開いたことを結論する。

【キーワード】 ニール・ゴードン・マンロー、民族知返還、マンロー書簡、アクセス権、民族学的協働作業、RAI、国立歴史民俗博物館、北海道開拓記念館